

# 特別支援学校教員養成課程に在籍する学生が想像する教師の人生

古屋 義博\*

## I. はじめに

「中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会」が平成26年11月6日に発表した『これからの学校教育を担う教員の在り方について（報告）—小中一貫教育制度に対応した教員免許制度改革—』や、「教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議」が平成25年10月15日に発表した『大学院段階の教員養成の改革と充実等について（報告）』などをはじめ、教員養成の改善に関する様々な要請が続いている。いずれの要請にも一定の合理性がある。一方で、それらの要請に応えるためには、教員養成系大学・学部<sup>1</sup>に在籍する学生のあるがままの現状を多角的に理解することが重要であると考えられる。なぜなら、学生の実態を把握することなく、大学教育は成立し得ないからである。

そこで、筆者は、学生たちが抱く教師という仕事のキャリアイメージ、つまり勤務を重ねるに従い教師の仕事がどのように変化すると想像しているのか（古屋，2015a）、教員養成系大学・学部<sup>2</sup>に入学した学生が自身の教職志望動機をどのような理由でどのように変化させるのか（古屋，2015b）、ということについて検討を行い、教員養成に携わる関係者は、教職に関する学生たちの認識をよりよい方向へと導くことの重要性を指摘した。本稿はその前者（古屋，2015a）の続報、つまり学生が抱く教師という仕事のキャリアイメージを明らかにすることを目的とする。

## II. 方法

### 1. 対象

国立大学教員養成系学部<sup>3</sup>に設置された特別支援学校教員養成課程（基礎免許状として小学校教員1種免許状の取得が必修）に在籍する学生（2014年度入学の1年次生）20人。内訳は女性13人・男性7人であった。

### 2. 実施日

2014年12月9・16日

---

\* 山梨大学大学院総合研究部教育人間科学域

### 3. 手続き

手続きは先の報告（古屋，2015a）と同様であるが，以下に再掲する。筆者が担当する通常の講義を次のように実施した（2014年12月9日）。

#### （1）特別支援学校の教師の業務内容に関する説明

本研究の調査に関する説明を行う前に，特別支援学校の教師の業務内容について，「NHK教育『仕事図鑑』no. 168－特別支援学校の先生（30分）」の視聴を入れながら，学生に説明を行った。説明の直後に，質問の機会を提供した。その質問に筆者が回答することで，特別支援学校の教師の業務内容のさらなる理解を促した。

#### （2）本研究の調査に関する説明と実施

次いで，本研究の調査に関する説明を行った。「各自の人生設計はまだかなり流動的であると思われるが，もしも特別支援学校の教師に大学卒業後になったとしたら，教師としての自分の人生をどのように想像するか」と教示して，定年退職の少し前を基準にした10年刻みの年齢（28歳，38歳，48歳，58歳）で記入できる用紙（A4判横置き）を配布した。記入用紙を図1に示す。

想像する「特別支援学校の教師としての自分の人生」		
23歳	所属や係など	県立特別支援学校(知的障害)小学部2年生学級の副担任/生徒会指導担当
	仕事の様子	視聴したビデオの「○○先生」のように，先輩の先生のアドバイスを受けながら，教材作りの子どもの関係作りに取り組んでいる。生徒会指導担当として，高等部生徒の役員と共に，様々な行事の準備や運営をしている。
28歳	所属や係など	
	仕事の様子	
38歳	所属や係など	
	仕事の様子	
48歳	所属や係など	
	仕事の様子	
58歳	所属や係など	
	仕事の様子	

図1 本研究で使用した記入用紙

1週間後の当該授業（2014年12月16日）までの期間に熟考したうえで記述して，当該授業で各自発表（各自，約3分間程度の持ち時間）するように指示をした。

なお，この記入用紙に記述されたことについては，誤字脱字や文法上の誤りの訂正およ

び匿名化を図ったうえで、学術論文や他の授業などを通して公表する予定のあることを学生に説明して同意を得ている。また、記述された事項と当該授業の成績評価とは無関係であることも説明した。

### Ⅲ. 結果と考察

20人の記述（回収率100%）を得た。各記述について、予め以下の4つの型を想定して分類を行った。

- I型：教諭から管理職へ
- II型：教諭のまま定年退職
- III型：家庭事情などで定年前に退職
- IV型：転職のため定年前に退職

分類の結果を図2に示す。先の報告（古屋，2015a）との比較のため、2013年度生の結果を合わせて図2に示す。

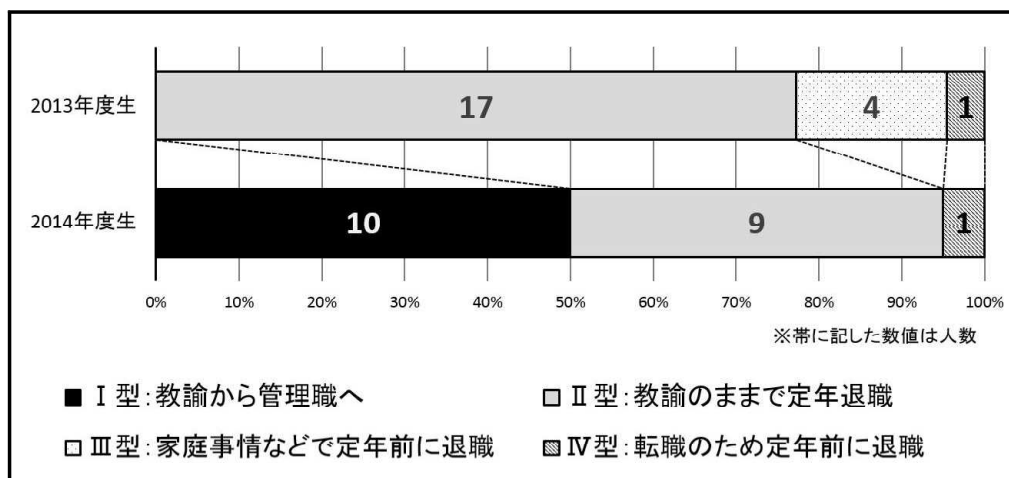


図2 学生が想像する「特別支援学校の教師としての人生」の集計結果

先の報告（対象は2013年度生）では、II型（教諭のまま定年退職）を想像した学生が多かった（17人/22人）。一方、本報告（対象は2014年度生）では、I型（教諭から管理職へ：10人/20人）とII型（教諭のまま定年退職：9人/20人）が拮抗していた。両報告とも同一の手続きであったため、傾向が変化した理由は不明である。

以下、先の報告にはなかったI型（教諭から管理職へ）に分類された10人の学生の記述と、IV型（転職のために定年前に退職※）に分類したが、管理職を経て定年前に退職との記述であったため、この記述についてもあわせて報告する。

1. 想像した役職について

記入用紙の「所属や係など」欄への記述を表1に示す。I型については、管理職として、校長（4人/10人）、副校長（1人/10人）、教頭（5人/10人）であった。IV型については、48歳で教頭でその後大学教授に転職との記述であった。

表1 学生A～Jが記述した各年齢時点の校務分掌や役職など

	28歳	38歳	48歳	58歳
<b>I 型：教諭から管理職へ</b>				
学生A	学級担任 図書館管理担当	学級担任 生徒会指導担当	(未記入) 生徒指導主事	校長
学生B	学級担任 生徒指導担当	学級担任 総務部担当	学級担任 生徒指導担当	校長
学生C	学級副担任 (未記入)	学級担任 新任教諭指導担当	学級担任 学年主任	校長
学生D	学級担任 保健・環境部	学級担任 学年主任	(未記入) 教務主任	校長
学生E	学級副担任 (未記入)	学級副担任	学級担任 生徒指導担当	副校長
学生F	学級担任 (未記入)	学級担任 (未記入)	学級副担任 (未記入)	教頭
学生G	学級担任 (未記入)	学年主任 (未記入)	学部主事 生徒指導主任	教頭
学生H	学級担任 生徒会指導担当	学級担任 (未記入)	主幹教諭	教頭
学生I	学級副担任 生徒会指導担当	学級担任 生徒会指導担当	学級担任 生徒会指導担当	教頭
学生J	学級担任 保健安全指導担当	学級担任 広報担当	学年主任 進路指導担当	教頭
<b>IV型：転職のため定年前に退職</b>				
学生K	学級担任 保健・環境部	学級担任 生徒指導部	教頭	大学教授

## 2. 想像した各年齢時点の仕事の様子

先の報告（古屋，2015a）では，対象の学生から児童生徒への直接的な働きかけやその働きかけを支える教材づくりや保護者との連携などが多く記述され，その記述に関する考察を中心的行った。本稿では，先の報告にはなかったⅠ型の校長（4人/10人）と副校長（1人/10人）と記述した5人（学生A～E）の記述と，Ⅳ型（1人：学生K）の記述の中から，自分自身が担任する児童生徒に直接的に働きかけること以外の想像について主に取りあげることで，先の報告の考察との重複を避けることにする。なお，考察部に反映させた代表的な回答の箇所には下線を付ける。

### (1) 28歳になったときの仕事の様子

学生A：特別支援学校（知的障害）

これまでの自分の授業や先輩のアドバイスをもとに，自分なりの子どもとの関わり方や授業・教材作りに取り組んでいる。また，図書館の管理を通して学級の児童のみではなく，他の児童との関わりをもつ。

学生B：特別支援学校（知的障害）

だいぶ仕事に慣れてきて，まわりの先生と協力しながら，子どもの力（よいところ）を少しでも伸ばせるように工夫している。生徒指導部担当として朝，校門の前に立ち，あいさつをしている。

学生C：特別支援学校（肢体不自由）

特別支援学校の教員として子どもとのよりよい関係づくりのコツをつかみ，小学部最高学年の授業を担当している。

学生D：特別支援学校（知的障害）

同じ学年の先生のアドバイスを受けながら難しい時期にある子どもたちとの関係作りに取り組んでいる。子どもたちが心身共に健康に過ごせるように教室や校内の美化活動に取り組んでいる。

学生E：中学校特別支援学級

先生として5年くらいたって，授業や教材作りに少し慣れてくる。中学校という場で，健常児と障害児がよりよく一緒に過ごすためにはどのような学校生活がよいのかを日々考えている。

学生K：特別支援学校（知的障害）

少しずつ教員の仕事に慣れてきて，試行錯誤しながら自分なりの教材作りの工夫の仕方を学び始める。また，修士号を取得するために，大学院に通うことを考え始める。保健・環境部として清掃活動の指導を行っている。

校務分掌の業務を通して行われる，多くの子どもたちとの関わり（学生A）や環境整備（学生D），あるいは同僚との協力（学生B）が挙げられた。また，交流及び共同学習への積極的な取り組み（学生E）が挙げられた。学生Kの場合，修士課程への進学について検討し始めると記述されている。

### (2) 38歳になったときの仕事の様子

学生A：特別支援学校（軽度知的障害）

県内の軽度知的障害専門の特別支援学校に異動になる。これまでの特別支援学校とは若干異なると思うが，これまでの経験を生かして生徒指導を行い，これまでの経験で対応できないことがあれば新しく学び，よりよい学級運営を行う。

学生B：特別支援学校（知的障害）

勤務する学校の中で経験を積んだ先生として，新人の教員にアドバイスをしたり，相談にのった

りしてサポートしている。また、総務部の担当として、P T Aの関係者と話し合いをして連携をすすめている。また、ボランティア活動にも積極的に参加して様々な経験を積んでいる。

学生C：特別支援学校（肢体不自由）

教師歴15年となり、中学部3年生の担任を任せられるようになる。またこの頃から同じチームの新任教師に指導をするようになっている。

学生D：特別支援学校（知的障害）

初めて高等部担任となり、戸惑いながらも生徒のわかりやすい教材の工夫や安心できる環境作りを旨として熱心に取り組んでいる。学年のリーダーとして、他の学級担任と協力しながら、学年をまとめている。

学生E：小学校特別支援学級

小学校にある特別支援学級の担任になり、副担の先生とのチームワークで学級運営を頑張る。また、通常の学級との交流イベントも自分が主催者になって開催するようになる。仕事が忙しいことそのものを楽しむようになる。

学生K：特別支援学校（知的障害）

2年間大学院に通い修士号を取得する。生徒指導部の担当者として、生徒の登下校や服装などを指導する。子どもに対する指導法も大きく進歩し、経験も積み重ね、同僚から頼られる存在になる。

人事異動先で新たに学び直す自分の姿（学生A）が挙げられた。同僚、特に後進への指導（学生C）や教職員集団のまとめ役（学生D）、保護者との連携強化（学生B）なども挙げられている。また、学生Eは「28歳」のときに取り組んでいた交流及び共同学習について、「38歳」のときには中心的な役割を果たしている姿を記述した。学生Kの場合、この頃にはすでに修士号を取得していると記述されている。

### （3）48歳になったときの仕事の様子

学生A：特別支援学校（軽度知的障害）

これまで自分がみてきた子どもたちの特性や、指導上の経験を活かして生徒指導担当として学校運営に関わる。生徒の悩みなどを親身なって聞いて、その子どもにあった進路や生活などのアドバイスをしている。

学生B：特別支援学校（病弱）

病気で入院していて、学校に通えない子どもたちが来る院内学級で子どもたちに勉強を教えながらも子どもたちの抱えている不安や悲しみを和らげようと努力している。生徒指導部担当として、子どもたちの生活上の指導指針の作成を行っている。

学生C：特別支援学校（肢体不自由）

教師歴25年のベテランとなり、同じ高等部の他の先生たちに頼られる教師になっている。また、学年主任として学年全体をまとめ、学校運営に深く関わるようになっている。

学生D：特別支援学校（聴覚障害）

教務主任になる。先輩に相談したり、子どもたちの意見を聞いたりして、カリキュラムの検討や時間割の作成などを行っている。また、教育実習の受け入れも積極的に行い、次世代の教員育成を行っている。

学生E：特別支援学校（聴覚・視覚）

今までとは違う環境に戸惑う。今までは小学校で比較的軽い障害をもった子どもをみてきたが、前よりも重い障害の子どもの割合が増え、改めて障害について勉強しなおす。

学生K：特別支援学校（知的障害）

教員をしながら大学院に通い博士号を取得する。教頭としての職務を全うし、職員から慕われる存在になる。また、教材作りに関する実績が認められ、大学教授への誘いが届く。

校務分掌の業務を遂行することを通して学校運営に携わる姿（学生A・C）や、学校の教育計画の作成に関して中心的な役割を果たしている姿（学生D）が挙げられている。また、これまでの自分自身の実践経験を広く多くの人が活用できるようにする取り組み（学生B）や次世代の教員の養成（学生D）も挙げられた。学生Kの場合、教員としての仕事を続けながら博士号を取得して、さらに実績を認められ大学教授への転職がなされると記述されている。

#### **(4) 58歳になったときの仕事の様子**

学生A：特別支援学校（軽度知的障害）

これまで見てきた様々な特別支援学校や自分の経験をもとに、（校長として）生徒・教員が過ごしやすく、学習しやすい学校作りを行う。長年の教師人生を歩む中で産まれた理想の特別支援学校像を同じ学校の教員とともに目指す。

学生B：特別支援学校（知的障害）

学級担任の時には忙しくてできなかったが、小学校や中学校、高等学校に行って、特別支援教育についての理解を深めてもらうため、または障害のある子どもとそれらの学校との橋渡しとなるようにと、講演を行っている。

学生C：特別支援学校（肢体不自由）

長年の経験を生かしてついに学校のまとめ役になる。管理職となったが、子どもたちを見守る心は忘れない。

学生D：特別支援学校（視覚障害）

学校に通う子どもたちと積極的に関わりながら、校長として子どもたち一人一人が自分の長所を伸ばし合い、生かしていけるような学校、そして教師たちがお互いに協力し合いながら過ごせる学校作りをしている。

学生E：特別支援学校

毎日一つ一つの教室を回って、子どもたちと交流する時間ももって過ごす。若い先生のサポートもしっかりできる先生になっている。

学生K：国公立大学

大学生を相手に、自分が経験によって得た知識を教える教授としての責務を全うする。担当は知的障害児教育で、特別支援学校の先生となる人材に、知識と心構えを説く。

「子どもたちを見守る心は忘れない（学生C）」との記述がもっとも代表的であるが、子どもに対するこれまで通りの姿勢を大事にしながら、管理職としての役割が様々に記述されている。管理職として教職員集団をまとめる（学生D）、子どもも教職員も居心地のよい学校にしたい（学生A）、後進を育てる（学生E）、全教職員で理想の学校をつくっていく（学生A）と挙げられた。また、自分自身の経験を生かして特別支援教育に関する啓発活動に取り組む（学生B）との記述もあった。学生Kの場合、大学に勤務して特別支援学校教員養成に携わっていると記述されている。

#### IV. まとめ

先の報告では、総じて「Ⅱ型：教諭のまま定年退職」と「Ⅲ型：家庭事情などで定年前に退職」に分類された記述で、教諭として子どもに生涯、向き合う教師像であった。一方、今回の調査では、理由は不明であるが、先の報告では皆無であった「Ⅰ型：教諭から管理職へ」に分類された記述について取りあげた。

「教諭は、児童の教育をつかさどる（学校教育法第37条第11項）」自分の姿に関する肯定的な想像が記述され、教職歴を徐々に重ねながら、担任する子どもや学級以外への関与にも取り組みが広がり、さらに同僚性や後進の指導などにも目が向けられる。そして、管理職（校長）になる自分の姿が想像されて、「校長は、校務をつかさどり、所属職員を監督する。（学校教育法第37条第4項）」自分のより肯定的な姿が記述されていた。その姿をまとめれば、後進の育成、同僚性の質的向上、理想の学校や教育の創造、他の学校種や地域に向けての啓発活動などであった。

また、学生Kの記述は分類上、Ⅳ型（転職のために定年前に退職）であったが、管理職を経ての転職（教員養成大学教授）であったため、Ⅰ型（教諭から管理職へ）に準じて検討を行った。研修制度を活用しながら、学歴や教育実践力を高めていく姿が記述された。

教員養成に携わる関係者は、教職を志望する学生たちに対して、「教諭は、児童の教育をつかさどる（学校教育法第37条第11項）」以外の教職の魅力、つまり学生A～E・Kが記述したような事項についても随時、情報提供をしていくことが必要と考えられる。

※Ⅳ型（転職のために定年前に退職）について、先の報告（2015a）では、「夫と、障害の有無に関わらず、地域の子ども達が気軽に足を運べて、集えるような児童館を運営する。」であった。

#### 文献

- 1) 古屋義博（2015a）特別支援学校教諭養成課程の学生を理解する試み（1）－彼らが想像する「教師の人生」から－. 山梨障害児教育学研究紀要, 9, 69-80.
- 2) 古屋義博（2015b）特別支援学校教諭養成課程の学生を理解する試み（2）－教職志望動機の変化の理由から－. 山梨障害児教育学研究紀要, 9, 81-89.